
風わたる

沙山はるか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風わたる

【Zコード】

Z3044M

【作者名】

沙山はるか

【あらすじ】

社会人何年目かの青年と、不思議な女性とのおかしな関係から、いつしか身近な存在がなくてはならない存在と想うようになつてゆく。

出番い（前書き）

2年くらい前に書いて、他の作品を書いていたら、真っ白になってしまった作品です。ですから、1、2話のベースは以前のままで、改めて書き直して再スタートです。

出会い系

どうも蒸暑くてイライラする。

だから、オレは梅雨はキレイだ。

今日もいつもと変わらない毎日だ。

会社では秃げた上司に業績不振の憂さ晴らしにオレは怒鳴られる。一通りの説教と午前中の打ち合わせを済ませると、挨拶回りと称して狭い箱を抜け出した。

どうせ同じ空間に居たって代わり映えしないグラフと睨めつける。ならば、得意さん周りをして季節商材のPRをしに挨拶回りをしていた方が、よっぽどいいに決まっている。

サンプル商材とポスターが入ったダンボールを車に詰め込んで、マーキングした愛用の地図とケータイを持って出発だ。

型落ちの営業車を走らせると、ラヂオからは流行りのJ-POPが流れてくる。

鼻先でハミングしてみる。

メロディーだけは何度も耳にしているから覚えてるが、歌詞なんて知らない。

名前も思い出せない彼女の甲高い歌声は、オレには合わないらしい。何故ならこの蒸暑さを倍増させるからだ。

カーエアコンはかけているけど、走り出した車内はサウナ状態でステアリングも火傷するほど熱い。

腹がグウッと鳴った。

県境にある大きな川の河川敷で昼にするか。川からの風がこんな日は気持ちがいい。

仕事なのはもつたといない、自転車で河川敷を走り抜けたいくらいだ。昼飯を調達してくると、早めのお昼を食べて土手に寝転がっていた。そこでオレは不思議な彼女と会った。

一見なんでもない風景なんだけれども、ジッと凝らしているとそれが分かつた。

彼女が声なき会話をしているようだ。

その度に風が強く吹いたり、弱く吹いたり、あるいはピタリと止んだりするのだ。

初めは自分に

大丈夫か、オレ。今日は疲れているだけじゃないのか。

錯覚、そう錯覚だ。この蒸暑さのせいだ。暑くておかしくなつちまたんだ、きっと。

なあんて思おうとしていたのに、聞いてしまったんだ、その声を。

「ね～え～、風さんはどう思つ? 明日話したほうがいいかしら。」

-----サワサワ～と風は優しく吹き抜けていった-----

「やつぱりそう。仕方がないわねえ。気合を入れていくしかないわね。ありがとう(*^○^*)」

-----ふわあ～と彼女の事を包むように風は吹き、止んだ-----

彼女は目をつむつたまま一ヶ口リと笑って

「はいはい。明日、結果報告にこじく来ればいいんでしょ。分か
りました。」

-----再びふわあ～と吹いたかと思うと今度は、ボワ～と
音を立てて勢いよく上昇気流のように吹き上げて、最後にはまた優
しく流れるように吹いて去っていったように感じた-----

その間のオレの思考回路は「？」

の嵐だったのは言つまでもない。
頭の中では一生懸命理解しようと/oro/しているオレと
白昼夢の続きだから気にすることない。
と呼びかけるオレがいた。

寝転がつたオレの左斜め上つていつのかな、そんなあたりにちゅう
どデカイ木があつた。
その木の反対側に膝を抱えるように座つた彼女は、宙を見上げてい
た。

たぶん15分かそこらだと思つ。
気持ちよさそうに風をあおぐように田をつむつたままの彼女にみと
れているオレ。

そんなオレ自身を客観的に気づいたのと、今までのオレの生活には
考えられないシーンすきで固まつてしまつた。

もう一人のオレが囁く。

今ここでピクリと動いたり、微かな物音でもたててしまつたら、ど

うなるか分かつていいよなあ。この全ての状況を壊してしまつだろ
う。オレのせいだな！

背筋を冷たい何かが走った。

ただただこの瞬間を壊したくなくて、このまま見つめていたくて、
そつとケータイを上着のポケットにしまい、マナーモードにした。
つていうかそれがオレに出来る精一杯だつたと思つ。

よくよく考えてみると何故こんな行動をとつたのか今になつても良
く分からぬ。

出余り（後書き）

さてさて、イメージばかり膨らんで手が追いつきません。

「はじめ（前書き）

焼き直しつて感じの作業だったので、『せいかなんいか不安なんですか、投稿しかやいます。

次回からはホントに真つからスタートなので、どうなるか自分自身わかりません。

やつと話せたのに……もどかしい一人です。

河川敷から親水公園が続く。

梅雨の晴れ間を利用して、川向かいに広がる団地のベランダには布団がたくさん干されていて眩しい。

面積の広い白っぽさが並びまくつてソーラーパネルかよ。って感じだ。

そういうえば、彼女を見つめてどれくらい経ったんだ。

確かオレがここへ来たのは昼前ぐらいで、太陽の位置からしたら恐らく1時間程度ってところだろ？。腕をあげて時計を見るのも怠い。それに彼女に気づかれてしまつ。なるべくじつとしていたかった。

すると、何を感じたのだろうか、すう～っと立ち上がって両腕を上に伸ばし、背伸びをしているようだ。

彼女は一瞬固まつた。

しまつた！オレに気がついたのだろ？。少し頬を赤らめて、急いでしゃがみ込んでしまつた。

何か話せなきやつて思えれば思ひほど、言葉が見つからない。

「大丈夫だよ。隠れなくても。オレの方」セリフメン。

つていうかおい、何謝ってるんだ？ オレ。

「いえ、いやいや。すみません。」

一瞬だけぞつぞつ伸びをしていた姿は逆光になってキレイなシルエットで、瞼にやさついて忘れない。

まるでなんかの占いのカードみたいな、アンティークな壁画みたいな、上手く言えないけどそんなふうに見えた。つていうかもう一度見てみたい。

それに一言だつたけど僅かに聞こえた小さなその声は、とても耳に心地いい響きだった。風に話しかけている時と違つて、少し緊張している感じがまたいい。

こんな風に感じるなんてオレらしくもないが、やつぱつもう一度彼女の声が聞きたい。

色んな衝動が頭の中を駆け巡った。

勢いなのか勇気なのか分からぬが、とつせに口をついて言葉がとんでもない訳の分からぬ言葉で、オレ自身どうしようもないヤツだよな。つとつぐづく嫌になつた。

「もう一度、聞かせてくれないか？」

「は？ えつと。」

ほらな、意味不明なこと聞くから迷っちゃつてるじゃないか！
完全にオレ、ヘンなヤツだと思われてるよ。

何か言って会話を続けないと！

「『ゴメン。イヤなんでもないんだ。気にしないでくれ。ただ、ただ。何ていつのかな、もう少しのままでいたせて欲しいんだ。』

「はい。分かりました。」

「…恥じと恥じらいの入り混じったよつた声で返事をしてくれた。ゆっくり交わされた言葉の間にも、頭の中では次は何を言おうか。何てきり出そうか。ぐるぐると言葉を巡らせていた。さながら十代のまだ青い頃みたいに『キドキしながら。

落ち着いて考えてみたつておかしな話だ。絶対フツーだつたら知らない男に”このままこなせて欲しいんだ”なんて言われたら、どんなヤツだつて怪しきつて思うはずだ。うん。やっぱり聞くのは一つだろ？ それが一番自然な流れだと思うしな。

「こきなりだけど、聞いてもいいかな？」

「誰と話していたか。ついて」とですか？」

「え？！ いや、まあ、そうだけ。 風とだら。

「分かりましたか。まあ、そつですよね。お恥ずかしいんですけど、忘れてください。」

恥ずかしい事？ 彼女はそんなふつに思つていたのか。

全然恥ずかしい事じゃないのになあ。

確かに初めは不思議だな。つとは思つたけど、何故かイヤな気持ちじやなかつたし。

「こや。全然恥ずかしいこと思つた。むしり、すうこと思つた。」

「普段は心の中で聞いたりしてこるんですけど、口口だと自然と口

「じひやつて。

せんせんすいこ事じやないですよ。いい年してつて感じですよねえ。

」

確かに恥ずかしいって思つていた事に対しても正反対のスゴイ事なんて言われたらな。

しかし、いい年してなんてオレより5歳は確実に下に見える。学生だよな、たぶん、絶対。

「私も聞いていいですか？」

オレは逆に驚いたが、しつかりと頷いた。

「どうして聞かないんですか？ 私がこうして話していくこと。

「いや。別に。心地よかつたから、かな。

それより明日、頑張れよな！ よく分からぬけど。何か頑張るんだろ？」

「はい？ え？ ノノノあつはい。でも、いいんです。別に大したことではないです。」

その後は、それこそ大した話はしないで軽く「じゃあ、また。」つと分かれた。

午後は挨拶周りに行つたけど、やはり頭のどこかで、全然初めて話す感じがしなかつたのは何故だろうかといつ事ばかり考えていた。

とつあえず、明日同じ時間同じ場所で彼女を待つことにした。
そつすれば謎が解けるはずだし。

名前だ。名前も聞いてなかつた。

明日は名前を聞くところからはじめるよー！

つて何段取り考へてるんだよ。オレ。

君の名

昨日とはうつて変わって散々な土砂降りだ。

なぜだろ。オレは彼女が絶対に必ず来ると感じて、逸る気持ちをムリヤリ抑えて時を待った。

あまり早くも遅くもなってはダメだ、昨日より若干早いくらいがちようどいい。

デスクトップの端っこにあるデジタル時計が10時半を過ぎると、ソワソワ感が頂点に達した自分に気付く。

ハゲヅラの上司に捕まらなければサッサと脱出だー！

とりあえず、出来るだけあの場所に近い位置に車をつけよう。あとは行ってから考えればいい。

それから、今日は彼女の名前を聞かなければ！

そんな事など色々と考えながら土砂降りの雨の中、会社のボロ車を運転していた。

堤防沿いの国道を走りながら、ふと頭を過ぎつた。

傘一つさしてなかつたら……いや、仮に傘をさしても、この雨の中じや役に立たないだろ。

温かい飲み物でも買って行こうか？　でもいなかつたら仕方がないか。

コンビニを横目に走り、通り過ぎた。

ワイパーが忙しく雨水を掻き分ける。

まるでオレの気持ちのように落ち着きがない。

遠くにあの木が見えてきた。

その元に赤い点が見える気がした。

それはだんだん近づくにしたがって、気ではなく確信出来るようになる。

もつと近づくと赤い傘がクルクルと回っているのが分かった。それを見て少し安心した。

「やあ。今日は凄い雨だな。」

「こんなにちは。……えっとお。」

軽く会釈をしてから大きな瞳が宙を泳ぐ。

「オレは、双木 龍治。なみき りょうじ 双子の双。樹木の木。で“なみき”つていつのや。まあ、”龍治”でいいよ。」

「はい。りゅ、龍治さん。昨日はありがとうございました。
あつ、私は倉橋 友里恵です。」

少し表情の明るい彼女は、声のトーンも明るめで軽くお辞儀した。

「えつ あつ いやあ。オレは何も、してないし。

でも、君がそう感じてくれるなら…………どうも、ざういたしまして。

」

「実は今朝、ずっと声をかけようと思つていた方に話しかけてみたんです。でも、なんかしつくり来なくて……でも、いいかな。って吹っ切れたんです。

百年の恋も一瞬で、つていうあの感じが分かる気がします。言葉つてすごいですね、どんなに色々取り繕つてもとっさに出す言葉っていうのは飾れないですものね。」

そこまでゆつくりだけど、一気に話すと深呼吸のように彼女はふ〜

つと息をついた。

そして少し表情が曇つたかと思つと、一筋の涙が零れた。

言葉がつまつて上手く言葉にならないのだと察した。

それに、それ以上はオレ自身も聞く必要もないし、聞けないし、別にそこは重要じゃないと思つた。

ただ何とか励ましたくつて勇気づけてやりたくつて一生懸命にオレは言葉を探した。

気が付けば雨の激しさは弱まり、次第に空も薄明るくなつてきた。川からの風が湿つた空気を包み込んで何処かへ運んで行ってくれるかのように、爽やかに頬を過ぎる。

細かい雨粒が吹きかかる。

どこか遠くからオヤジバイクの音がする。おばちゃん自転車も堤防沿いの道を走る。

そんな音に反応してか、傍の大きな樹の枝から雀がたくさん飛びたつていいく、枝から弾かれた雨水が傘に当たつてバラバラ音がする。雨が上がり始めて、景色が動き出してきた。

「風邪の様なものかもしれないよ。早めに分かれれば、直ぐに治療して早く治るし。」

「ふふふ。龍治さん、ありがとうございます。そうですね。ホントにそうですね。」

そう言つて空を仰ぎ見た彼女にふんわりと風が吹いた。

黒い長めの彼女の髪が舞い上がるよになびかれて、かすかに止まつた後、優しく撫でるように吹いた。

「もしかしたら……」

「え？ 分かっちゃいました？ すみません。」

「いや、謝らなくていいよ。うーん、そうだ！ 腹へらないか？ 昼でも食べに行こうか。今日はオレのおじりだ。大した物はご馳走できないけど。」

堤防沿いの道に止めたボロ車に乗った。

彼女は昨日のお礼に美味しいカフェレストランを紹介してくれた。そこは以前ローカルタウン誌に紹介されて知ったとか。最近は広告こそ出していないが、美味しいとボリュームのわりにリーズナブルな点がリピーターをよんで、ピークタイムは待ちの客が並ぶほどだという。

それでも、時間帯を選べばゆっくつ出来る雰囲気も氣に入っているらしい。

後で店についたら会社に電話して、今日は午後から病休となるとじよう。

ランチ

人生というものは分からぬ。

昨日の彼女との出会いがなければ、こんな風に寝不足になつて苛立つ事もなかつた。

いつもの様に氣だるい気持ちで出勤して、ボロの営業車を走らせ、ただなんとなく過ごす毎日を繰り返すだけだった。

カーテンを開けると朝とは思えなこよくな暗く重い空が広がつていた。

どれだけ降れば氣が済むんだ?と空に問いたくなるようなほどバシヤバシヤと音を立てながら降り続ける雨。

アスファルトは色濃く染み渡り、いくつもの小川が出来ている。夕べは風と雨とが激しく吹き荒れていて、窓を強く叩きつけていた。まあ、それに比べたら少しはマシにもなつたつてところか。

その音のおかげで寝起きは最悪。

尤も眠りは浅いままだつたから、寝起きなのに疲れが抜けきらない訣然としない感覚だつた。

風や雨音だけでなく、彼女の事が気になつてなかなか眠れなかつたのも確かに少しあるだろう。

そつ少しだけだ、きっと少しだけ。

そして、仕事も口クに手をつけずに飛び出したオレの手に飛び込んできたのは、約束もほとんどないまま土砂降りの中赤い花のようこの場所に立っていた彼女だった。

確かに『じゃあ、また明日』と言つて昨日は別れたけど。名前も知らない、ただ居合わせただけの間柄の二人なのに、オレが来ると信じて待つていてくれた。

彼女の決意した何かが良い結果にしろ、そうでなかつたにしろ、今の今、オレには関係ない。

今の今、一緒に話しが出来るだけでいいと思つてゐる。

彼女は友里恵といった。

やつと名前を聞けた時は、10代のガキみたいに内心喜んでみたりした。そんな自分自身が可笑しくも思えた。

彼女は不思議な女性だ。

一言でいうと「見ていて飽きない」。

不思議と言つたら、やつぱり風と話すことだ。

不思議だとは思つたが、別に変だとか恥ずかしいことだけは思わなかつた。

だけど、彼女自身そのことを恥ずかしいことだと言つ。

身のこなしと同じように緩やかな時間を好む。

時々、表情にしろ、言葉にしろ、くるくると変わつて、予期しない言動に驚き戸惑うが、厭味がなく新鮮に思えた。

とにかく彼女の一つ一つの言動が新鮮で目が離せないでいる自分がいる。

思いつきで誘つたランチだつたが、目に見えない何かに引き寄せられるように事が運んでいるような気がしてならない。

彼女が教えてくれたカフェレストラン『ドルチ』

太めの木枠と小洒落た磨りガラスにレースのカーテン。クラシックのBGMがしつとりとした空間に馴染んで、いかにも女

性が好みそうな、男同士だつたら少々恥ずかしくて決して足を運ばないだろう店構えだった。

ちょうどオレ達が店に入ると、精算しているカップルがいて、入れ替わりですんなり席に座れた。

彼女のオススメで、二人して日替わりセシトのデザート付きを頼んだ。

前菜のサラダをつついたり、自家製パンを食べながらビビン会話が弾んだ。

オレは取り繕おうとかカツコツけようとか、全然意識しないでフツーに話せた。

面白みの一つもないオレ自身の事、最近観た映画や気になる音楽の話だとか、他愛もない話の一つ一つに微笑みながら頷いて耳を傾けてくれている。

「なんだかオレばかりしゃべってばかりだな。いつもはこんなに話さない方なのに。」
照れ笑いを隠す様に頭を少し搔いてみる。

「ありがとうございます。龍治さん。」

「なつなんで、礼を言われなきやならないんだ？ 店だつて君に紹介してもらつたし、面白くも無い話に付き合つてくれて、礼を言つのはこいつの方さ。

そうだ、良かつたらでいいんだが、今度は君の事を聞かせてくれないか。少しだけでいいから、さ。」

彼女は俯き加減になつて、食べかけのパンを皿に置いた。
そして、軽い吐息の後、ゆっくりと視線を上げていき窓の外を見ながら話しあじめた。

何となく改まつた気分になり、組んでいた足を下ろして座り直した。

「絵を、描いてるんです。 そんな大したものじゃないんですけどね。

本の挿絵や企業広告やパンフとか、依頼されたものを一つ一つこなすのが精一杯なんだけど。

普段は、仕事場にこもってひたすら描いてるんです。

朝の散歩と、時々息苦しくなつたり煮詰まつたりイメージが固まらなくなつたり悩んだりすると、河川敷に行くんです。

こんな生活も事務所が決まって実家を出てきだから、もう3年くらいですかね。」

「なんかすごいな。オレなんかただ毎日流れるように過ぎていいてるだけなのに。」

自分では口に出すつもりはなかつたんだけど、つい言葉を出したてしまつていた。

本心だつたから隠すことは何もないんだけど、彼女の言葉を遮つてしまつて話が終わつてしまつのが嫌で言葉を出したくなかったんだ。

「龍治さんつて、面白い方ですね。」

「え？ そうかな。」

「はい。だつて、私なんかの事に”すごいな”って何度も言つてくださるから。」

不思議と心地よく流れる時間。

少しずつキレイに盛り付けられたプレート、バジルの練りこまれたロールパン、オレのアイスコーヒーと彼女のレモンスカッシュ。食べ終わったプレートから片付けられてゆく……

そして、彼女の一番のお勧めでもある口替わりデザートのプレート。

彼女との距離が少しだけ縮まった気がした。

今まではただ鬱陶しいだけだった梅雨空も、湿った風が吹くだけで彼女を感じられる。まるで彼女がすぐ隣りで話しかけてくれているような感じがしてくる。

それに比較的夜型だった生活を朝型に変えてみようかな。なんて思っているオレがいる。

人生は、ホントによく分からぬものだ。

私の日課、朝の散歩。

風は風いでいたけど、雨はまだまだ降っていた。

今田は勇氣を出す田。

今まで見ているだけで充分満足だったのに、ハッキリさせたくなつた。

風さんと約束したつて勇氣が出ないでそのままいつも通りの朝を過ごす。つていこうとも出来たはず。

今までだつて似たようなことはあつたし。

でも今日は違ひ。昨日、彼にも聞かれてしまつたから。

赤い花柄の傘をさして、この梅雨を楽しく乗り切るために新調したばかりのショートレインブーツを履いて歩く。
いつもの道順でゆっくつと歩いてゆく。
いつもの公園、いつものコンビニ。

「こりゃしゃこませ、おはよげれこまか。」

いつものコンビニのお兄さんが、今日も笑顔で挨拶してくれる。

何度もこの笑顔に救われたかしれない。

何度もこの笑顔に包まれたいと思つたかしれない。

だけど、それは仕事だから……そんな事は分かつていたんだけど、もつと声を聞きたくて。

もつと私だけのための言葉をかけて欲しくて。

いつもは俯いて通り過ぎて朝食を物色するために店内を巡る。けど、今日は違う私だから。

「おはようございます。よく降りますね。」

「…………。」

もう既に手元を見て何か伝票整理みたいなことを始めてしまっていた。

その瞬間、私の中で何かが音をたてて崩れてゆくを感じた。

その後はぐるりと店内を巡つて出てきました。

ぼんやりと家路についた。

朝食を摂ることもせず、着替えもせず、ただただぼつんと座り込み時間が過ぎていった。

数時間後、足の痺れで我に返つた。

「ふふふつ。」

どんなに悲しい想いをしても、お腹も空くし足も痺れるんだ。って思つたら一人笑いが出て、同時にある事に初めて気付いた。

あんなにも心の中で慕つていたはずなのに、放心状態で何もする気を失つていたのに、悲しくない訳なのに、涙の一粒すら流れてこない。

ふと見上げて時計を見る。

10：30になろうとしていた。

洋服を並べて選んで、慌てて着替えて、髪を梳かして、鞄を手にして玄関を飛び出した。

いつもならレインブーツを履いていても水溜まりを避けて歩くのに、急ぎ足は止まらない。

あの大きな樹の下で彼が待っている気がしてならないから、不思議なドキドキが止まらない。

風との話を「すじー！」と言ってくれた彼が待っている気がして走った。

大きな樹の下に着くと誰もいなかつた。

赤い花柄の傘をクルクルと回してドキドキを鎮めようとしてみた。

昨日彼が去つて行つた方角をキヨロキヨロと見渡しながら、傘をク

ルクルと回して待つっていた。

雨粒が舞つて顔に当たる、湿つた風がフワシと吹いて瞬きをした瞬間に見つけた。

真っ直ぐに走つてくる彼の姿を。

何故かドキドキはホッとした安心感に変わり、楽しい気分になつて、また傘をクルクルと回していた。

「やあ。今日は凄い雨だな。」

やつぱり昨日みたいに爽やかに話しかけてくれる。
つられて私も軽く会釈をして自己紹介とお礼を言つ。

そして、なぜだか洗いざらい今朝の出来事を話してしまつたりした。

「実は今朝、ずっと声をかけよつと思つていた方に話しかけてみたんです。

でも、なんかしつくり来なくて……でも、いいかな。つて吹つ切れたんです。

百年の恋も一瞬で、つていうあの感じが分かる気がします。言葉つてすゞいですね、どんなに色々取り繕つてもとつさに出てる言葉つていつのは飾れないですものね。」

自分でも驚いた。

そこまで一気に話してから一筋の涙が零れた。

一人で部屋にいた時には出なかつたのに……

雨は弱まり、だんだん空も薄明るくなつてきた。
僅かな沈黙の後、龍治さんは言つてくれた。

「風邪の様なものかもしれないよ。早田に分かれれば、直ぐに治療して早く治るし。」

「ふふふ。龍治さん、ありがとうございます。」

「そうですね。ホントにそうですね。」

そう言つて、彼に巡り逢わせてくれた風さんに、心中でお礼を言つた。

ふんわりと風が私の髪を舞い上がるよになびかせたりして“どう致しまして”と吹いていった。

「もしかしたら……」

「え？ 分かつちやいました？ すみません。」

「いや、謝らなくていいよ。

うーん、そうだ！ 腹へらないか？ 昼でも食べに行こいつか。

今日はオレのおじりだ。大した物は『』駆走できないけど。」

一人で時々行くオシャレなお店、カフェレストラン『ドルチエ』を紹介して

二人で日替わりランチを注文した。

何故あの店を選んだのか自分でも分からぬ。
だけど、いつもと違う私のすることだから、理屈なんて分からなく
たつていい、ただ思いつきでだっていいと思つた。

彼は風との会話を「すごい！」って言つてくれる面白い人。
失恋した私を気遣かつて、楽しい話をたくさんしてくれた。

仕事や映画の話、よく聞く音楽の話とか一所懸命にどんどん話してくれた。

えーっと

「中小企業の食品メーカー」って言つてたけど、私でもよく知っている有名な食品メーカーに勤めること。

「今はまだまだ下っ端だから、いつもハゲヅラ上司にある事ない事
言われて突かれている」って（笑）

その上司さん一度見てみたい気がする。

「ちょっと親父混じりの25歳」つとはいうけど全然オジサンじゃ
ないし（笑）

しかも、もつと年上かと思つたら2歳しか私と違わないし。

今は禁煙中らしく灰皿を店員に返してた。「何とか3週間前に入つ
たところだから頑張ってるんだ」って言つてた。きっと龍治さんな
らこのまま止められると思うな。

「お酒は強い方じゃないけど飲むのは好き」って言つてたな。

一緒に飲みに行つたら、きっと楽しいお酒が飲めそうだな。

「映画はSFやギャング系が好きだけど、ホラー以外は大抵なんでも観る」って、最近は『シャーロックホームズ』を観たって。私も観たいなあつて思つていた映画だわ。

きっと楽しい話をいっぱい用意して話してくれんたんだと思う。それにじんじん引き込まれてとっても楽しい時間が過ぎていった。

最後に龍治さんは、私の話を聞きたいて振つてきたけど、私の毎日や私自身の事を振り返つたら沈んできちゃつて、あまり話したくなくなつてしまつた。

それでいつもなら口をつぐんでしまつけど、やつぱり今日の私は正直に素直につまらない毎日の事を話してしまつた。

なのに龍治さんはまた「すごい!」って言つてくれた。

思いつきり恥ずかしくなつた。

たくさんおしゃべりして美味しいモノ食べいたら、すっかり雨も上がつて虫の鳴き声がするくらい外も薄日が差してきて、あちらこちらの水溜りやフーンスに付いた水滴に日光が反射して、街がキラキラとしていた。

長い一日だつたな。

あつ長い半日か、だつてまだ夕方にもなつてなければ、おやつの時間にもなつてないわ。

まあとにかく、それでも一つだけ違わるのは、朝の散歩は公園を歩いたら土手の方に回つてあの大きな樹の下で一休みをするの。

風わたる時 会話がなくても 笑顔の一人がいる

次は誰の傍で吹くのだろうか

達ひ私（後書き）

短編にも長編にもなれない、中編？って感じの長さになってしまいましたが、とりあえず龍治と友里恵の距離が縮まるまでのロマ送り的な感じ絵描きたかったので終了です。

この一人のその後も書いてみたいなあとも思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3044m/>

風わたる

2010年10月14日23時03分発行